令和６年度　第２回新潟県スポーツ推進審議会　議事録

１　日時

令和６年８月７日（木）10：00～11：10

２　会場

新潟県庁行政庁舎１階　102 会議室

３　出席者

審議会委員 16 人のうち、12 人出席

西原　康行		嶋田　　愛	
青野　光子		柄澤　宏之	欠席
平山　祐子		若井　由梨	
渡邊　優子		阿部　修	欠席
星　枝里		藤澤　裕二	欠席
平野　英功		大森　　豪	欠席
栗原　康祐		小野塚　彩那	
本間　達郎		福崎　勝幸	

（敬称略）

４　内容

・開会あいさつ

・委員紹介

・定足数確認

・議事

（１）次期新潟県スポーツ推進プランの策定について

ア　第１回新潟県スポーツ推進審議会における意見要旨

イ　次期新潟県スポーツ推進プランの骨子粗案

（２）その他

○議事（１）次期新潟県スポーツ推進プランの策定について

（事務局）

資料１、資料２、資料３を説明

（西原会長）

ありがとうございました。それでは皆さんからご発言をいただきたいと思いますが、今ほど事務局から説明がありましたように、あと前川副部長からもお話がありましたように、前回の皆さんからいただいた意見、それから、次期県総合計画の策定状況などを踏まえてこの骨子案というものを作っております。次回はこれに基づいて骨子を確定して素案作成を具体的にしていきたいと思っていますので、それを意識して、皆さんからご意見をいただければと思っております。

どなたからでも結構ですが、それぞれのお立場からご意見をいただければと思います。こういったところを修正したほうがいいのではないかとか。

（渡邊委員）

４つ、修正ではなくて、いいなと思ったところです。

「Ⅰ 多様な主体におけるスポーツ機会の創出」の中の「２ スポーツに親しみのない人々のスポーツ参加を促します」というところで、新しく入れた、「(④ スポーツと）他分野の連携によって無関心層の運動促進」がとてもいい表現ではないかと思いました。新しく追加という案でしたので、そこはとても賛成です。

それから「Ⅲ 地域のスポーツ実施体制の整備・充実」というところで、「２ 総合型地域スポーツクラブを育成します」というところがありますが、その中の内容で、先ほども説明があったとおり、総合型クラブの認知度向上に向けて、今、登録・認証制度が令和４年度からスタートしていますが、全国で約3,500あるクラブで登録しているのは約1,000クラブに留まっているということで、なかなか、この登録のメリットとか、あとは市町村や行政がなかなか制度について理解がないということがいろいろアンケートの結果から出ておりますので、ここで「(② 総合クラブの）認知度向上（登録・認証制度)」というふうに入れていただいたので、認証制度も来年度からスタートする予定になっておりますので、これは、先ほどの課題である部分も少し解決できるかなと思いました。

それから「４ 中学校部活動の地域移行を契機とした～」の主な内容のところで、新しく、「① 関係者の連携強化、市町村の主体的な取組（の促進)」となっていますが、今、少子化で、もう市町村単位ではできなくて広域連携をしていかなければならないという課題がたく

さん出てきています。市町村を超えた場合、バスの送迎はどうするのかとか、大会参加も含めて活動に参加できるのかとか、そういったものが今課題になっているので、市町村単独、主体的というよりも、広域的なことをこれから取り組んでいかなければいけないかと思いました。

最後、「Ⅳ スポーツを資源とした地域活性化・交流拡大」というところで、「２ 地域自らが～」ということで、総合計画でも話がでていたですが、大規模イベントもそうなのですけれども、やはり地域が自ら資源を使って何か事業を興すというところがとても大事かと思いますので、この４点、私の意見です。

（西原会長）

ありがとうございました。特に新しく設けたところについて非常に高く評価いただけたのではないかと。また、渡邊委員は、県（総合型地域スポーツクラブ連絡協議会）の幹事長でもありますし全国の役職もやられておりますので、そういった観点からもご意見をいただきました。ありがとうございます。

例えば骨子のⅢ「４ 中学校部活動の地域移行～」で、今ほど広域のことがありましたけれども、県としては、非常に新潟県は広いので、今、部活動の地域移行では、広域ということをすごく意識してそれぞれやっていますが、文言として入れるべきか、あるいは「関係者の連携強化」のままで広域も含めてということで、特に広域という言葉を意識しなくてもよろしいですか。

（渡邊委員）

そこに該当すればそうなのですけれども、今、確実に市町村を超えてとか出てきているので、それも重要な部分かと思いますので、もしワードが入るならば入れていただけたらありがたいです。

（事務局）

主な内容については、項目立てで整理していますけれども、文章を作成するにあたって、参考にさせていただいて検討したいと思います。

（西原会長）

ありがとうございます。よろしくお願いします。ほかにいかがでしょうか。

（平山委員）

骨子案、大変ありがとうございます。

見させていただきまして、１つお話をさせていただきたいのですけれども、私、日ごろ思っていることで、働き盛りの世代の人の運動意識というのですか、スポーツへの取組というところが希薄になってきているのかなと思います。なかなか時間がない、仕事優先、家庭重

視というようなところで､時間を割いて運動をするというようなところまで意識がいかない。意識が向いている人と、意識が向かない人の差というところが大きいのではないかと思っています。ですから､年齢とともに､やはり体調の変化ですとか数値の変化というところが多々みられる中で、健康寿命の延伸であるとか、医療費の抑制という面でも、働き盛りの人たちへのアプローチをどうしていくべきなのか、またそのアプローチをしたあとのフォロー、定着化というところはどうすればいいのかというところも大事な１つの観点になってくるのかなと思いました。

（西原会長）

ありがとうございました。今、働き盛りの人たちのスポーツへの親しみというのが課題になっていますけれども、そういうこともまた具体的なところでぜひ対象として入れていただければ。

（事務局）

一例としてなのですけれども、柱のⅢ「５ デジタル技術を活用した～」というところで、健康・ウォーキングアプリというのを運用しています。まさにこれが働き盛り世代、子育て世代、忙しい世代にアプリを使っていただき、630 ほどの地域協力店と連携してインセンティブを与えて、歩きましょうというもので、企業でイベントに参加してみようという取組もやっております。あとそれを市町村に拡大していくなど、そういったアプローチも大事かと考えております。

（西原会長）

そうですね。ありがとうございました。また、具体的な評価指標の中に、その世代の人たちがどれだけそういうものを活用したかということがあると、そういったところも反映してもらえればいいかと思います。

ありがとうございました。ほかにいかがでしょうか。

（若井委員）

たくさんの資料をまとめていただいてありがとうございます。

Ⅰ「２ スポーツに親しみのない人々のスポーツ参加を促します」というところなのですけれども、やはりなかなかスポーツをしようと前向きになるきっかけとして、スポーツをすることで自分にどのようなメリットがあるかとか、付加価値や見える化したポイント・目標があったりすると前向きに取り組むきっかけになると思ったりしたので、ちょうど、先ほどウォーキングアプリなどの話があったと思うのですけれども、これをやったら自分にこういうポイントが返ってくるという目標設定ができる取組はすごくいいなと思いました。

それから、Ⅰ１「② 親子で体験できるスポーツ機会の提供」というところで、親御さんの

中で、なかなかスポーツに前向きではないけれども、親子で楽しむために、子どものためにやってみようかなという気持ちのきっかけになることができると思うので、親子で体験できるスポーツの機会というのは、新しい案としてとても素晴らしいと思うので、ぜひ進めていただきたいと思います。

最後に、Ⅲ３「①～スポーツ施設の整備（・利活用)」というところで、私自身の実体験として、週末に子どもと一緒に、どこか思い切り体を動かせるところを探そうといろいろ調べたりするのですけれども、ちょっとした狭いスペースや公園はあるけれども、体育館とか広いスポーツ施設で思い切り体を動かしたいねというときに、なかなか施設が見つからないということがけっこうあったりしたので、屋外の公園でも、雨天でも遊べるような広いスペースや施設がもっともっと増えていくととてもありがたいなと、個人的には、経験をとおして感じております。

（西原会長）

ありがとうございました。概ね、特に新しく加えたところについて評価をいただきました。

あとは、なかなか既存でもいろいろな屋内の施設があると思いますけれども、そういうものをうまく情報を発信していくことで、県民の方々が行く機会ができていいのかなと思います。課長、何かありますか。

（事務局）

やはり今、なかなか県内施設が認知されていないところもあると思うので、もっと発信できればと考えています。財政状況からするとなかなか新しく作るというのは難しいので、既存の施設を紹介するような情報発信を進めていければと思います。

（西原会長）

ありがとうございました。ほかにいかがでしょうか。

（小野塚委員）

今、平山委員からあったのですけれども、働き世代の部分で、働き世代とかは多分、私がけっこうヒットする世代なのかなと思っていまして、けっこう、今、若井委員からもありましたけれども、子どもと何かをするという部分で、今、オリンピック競技とかもそうなのですけれども、柱Ⅰの３「③ アーバンスポーツ等の新たなスポーツの体験機会の提供」というところで、割と自分たちの世代が、オリンピック競技になったサーフィンとかスケートボードみたいなアーバンスポーツを嗜好として行っている人たちが非常に多いなという印象があるので、そういう地域の施設と提携しながら、子どもも大人も初めて体験する、子どもと一緒に体験するという、柱のⅠの１（② 親子で体験できるスポーツ機会の提供）につなげたりなど、一個一個分けていくのではなくてトータル的に見ていくと、もっと、１「② 親子で体

験できるスポーツ機会の提供」とか、3「③ アーバンスポーツ等の新たなスポーツの体験機会の提供」とか、そこにさらに、「Ⅳ ～スポーツツーリズム～」とかにつなげていけるのかなと思ったので、１つ１つ分けるというよりは、全体的に、こういうふうにつなげられるよみたいな形で。分かりやすい表になっていると思うので、そういう形で全体を見ながら、そういう機会の提供ということも考えていけたらいいのかなと思いました。

アプリに関してなのですけれども、今どれくらい登録数があるのかということが個人的には気になったのですけれども、今の話の中ではウォーキングだけという印象だったのですけれども、正直、私も移動アプリみたいなものを使ってポイントをためてみようかなと思ってやってみたのですけれども、割とおっくうになってきて、位置情報をやらなければいけないとか、ＧＰＳを使うので電池がかなり消費されるのです。そういうところとかもあるので、ここに行ったらこれが貯まるみたいな、ウォーキングしなくても、そういう施設全体で提携しながらポイントがつくとか、何かそういう形で付加価値を付けるような形にしていくと、そういう働き世代の、けっこうアンテナを張っている人たちは、ああ、それが貰えるんだったら行こうとか、子どもにとってこういうのがいいのだったら行ってみようとかという気持ちになると思うので、何か全体をつなげていくような形でアプリも含めてやれたらいいのかなと思いました。

（事務局）

今、小野塚委員からおっしゃっていただいたことはすごくごもっともで、令和６年度新規事業で、ＢＭＸとかスケートボード、３ｘ３、ブレイキングなどのアーバンスポーツについて、今まで組織がばらばらになって個々でやっていたところを、一体的に県内で普及活動を行う事業を始めたところです。今後、上中下越でイベントをして、若者や子どもたちがイベントを見て、ああ、格好いいな、やってみたいなと思ってもらって、親子で参加してもらうといった取組も始め、それもまた強化していければというところです。

もう１点、アプリのダウンロード数は約３万 2,000 で、小野塚委員に言っていただいたとおり、歩くだけではなく、例えばアルビレックス新潟の試合に行ったりするとか、イベントに参加するとポイントが付くというようなこともやっています。あと、市町村とも連携して、市町村ならではのイベントをやっていただいて、市町村でいろいろなインセンティブ付与等をやってもらうことも広げようと取り組んでいるところです。

いただいた意見を踏まえ、関係機関と取り組んでいきたいと思います。

（事務局）

先ほどの「親子」の枠組みというのは、県全体として、子育て環境を整えていきたいと考えており、働く環境との関係も出てくるのだと思いますので、そうしたフレージングも考え

ています。

全体的にはＩ５に書いてあるとおり「インクルーシブなスポーツ環境」の考え方として、年齢・性別・障害や体力・技術の有無にかかわらず、すべての人が、誰でも、いつでも楽しめる環境をつくることとしており、スポーツ庁でも推進していきたいというところがありますので、そこに絡めるか、またはそういった文面が入るようにはしていきたいと思っています。

また、アプリに関して、スマートフォンのヘルスケアアプリと連動しているのでだいぶ取組はしやすいですし、貯まったポイントは、地域協力店で使えるようになっているので、一度、ダウンロードしていただければイメージが沸くと思いますので、ぜひよろしくお願いします。

（事務局）

あまり電池は消耗しないと思います。

（小野塚委員）

私が使っているものが古いのかもしれないです。

（事務局）

ＡｎｄｒｏｉｄやｉＯＳに標準で入っている歩数計測の機能を使っているので、位置情報を利用するアプリだと電池の消耗が激しいかもしれませんが、そういうこともないと思います。

地域協力店については、身近なところだと、2,000 円で 100 円値引きしてくださるドラッグストアがあるなど、お店の皆さんのご協力で特典をつけていただいているので、それぞれ特典が異なります。

（小野塚委員）

新潟市であれば徒歩でいろいろ移動が可能だと思うのですけれど、地域に出ると車移動が必須になってくるのです。ですから、特に私なども車がないと生活できないような場所に住んでいるので、そういう地域のことも少し加味していただけると、徒歩だけでは対応しきれない地域も少なからずやはりあるので、例えばサイクリングだとか、車だけではなくてほかの何か移動手段にしても、何か付加価値をまた別な形で検討していただけるといいのかなと思います。

（事務局）

参加したらポイントがつくイベント等を増やしていければと思います。

（小野塚委員）

あとはスポーツのボランティアとかでもあるといいかと。

（事務局）

アプリの中には、サイクリングを始めるときにスタートを押すと、距離を計算されるという機能があります。

骨子粗案に書いてある新規の施策の具体的なイメージというのが少し分かりにくいかと思うので、次回までにこの骨子でイメージしていることは何なのかということを示せるように考えたいと思います。

（西原会長）

ありがとうございました。アプリはどんどん進化していくから、いろいろなところに紐づけしたりしていくと、すごく魅力的なものになるのではないかと思っています。

あとは、小野塚委員からも、どうしても今、表現上、縦割りというか横割りというかになっていますけれども、多分、評価するときには、例えば親子で参加したイベントが何人来たとかという評価指標になれば、この指標のどの部分にそれが該当するのかということになっていくと、多分、連携して評価できるのではないかと思っています。そういう作り込みを多分していただけると思うので、それを見ていくといいかと思います。

ありがとうございました。ほかにいかがでしょうか。それぞれの専門的な立場からもし。せっかくですので。これがずっとこれから活きていくことになるので、皆さん、ぜひお願いしたいと思います。

本間委員、企業スポーツの立場からもしありましたら。

（本間委員）

現在、新潟県スポーツ協会内にある、社会人スポーツ推進協議会（社スポ）の幹事長を仰せつかっています。この協議会は、（国民スポーツ大会に貢献している県内の）いろいろなスポーツ団体に対していくら支援するかということを割り振ることが主な役割でしたが、10 年ほど前に東京 2020 オリンピックに向けて、（せっかくの日本開催の良い機会なので）新潟県からオリンピック選手を輩出しようじゃないかという気運が高まり、（何ができるか検討しました。そこで、地元企業がアスリートを支えるようなことはできないかということで、）会員企業にお声掛けをして協賛金を集め、大学生や社会人のアスリートの皆さんと会員企業とをマッチングする取組み（である「にいがたアスリートキャリアフォーラム」）を（2017 年に）始めました。

昨日８月６日に（「にいがたアスリートキャリアフォーラム 2024」を）開催したところなのですが、６名のアスリートと、企業も 20 社ほど集まり、アスリート１人１人がいろいろな企業の採用担当者と面談をしまして、（アスリート側の希望と、企業側の採用条件など）お互いに真剣に話をしていました。こういう機会をきっかけとして、地域に根差したスポーツ、

アスリートをどんどん地元に残していきたい。例えばうちの古俣（聖選手）もたまたま（今回のパリオリンピックで）銀メダルを取りましたが、いずれ現役を引退するような時期を迎えたときに、１つは、社会人として普通に仕事ができる人材に成長させるということが企業としての役目だと考えています。もう１つはスポーツ選手の役割として、そのスポーツの振興です。（古俣の場合を例に取ると、）フェンシングは県内の高校で部活動がある学校は３校しかないので、将来、指導者として地域に役立つ立場になってもらえればと思っています。（仕事と、アスリートもしくは指導者として両立できるように、取り組める環境を作ることと、）人を育成することが現在の課題だと考えています。

今までにこの社スポの取組みで、44 名のアスリートの方々が県内企業に就職して、働きながら自分のスポーツを続けているという状況です。

これからアスリートも歳を重ねていきますので、指導者としてかかわる、そういう形もどんどん作っていきたい。やはり良い指導者がいないと競技は強くなりません。パリオリンピックでフェンシングなぜ強くなったか、私もよく分からなかったのですけれども、（フェンシングの各種目でオリンピックのメダリストや出場経験がある、）非常にすばらしい方々が指導してくれたことを知り、監督、コーチが実力者であることがスポーツの質を高めていくには大事なことだと思いました。

あとは地域の活性化につなげ維持するために、スポーツをする環境づくり、そして施設づくりを進めるように提言をしていきたいと思っています。

（西原会長）

ありがとうございました。今ほど本間委員からも、あまりメジャーではないスポーツも企業に支えていただいたりとか、あとは小野塚委員からアーバンスポーツの話もありましたけれども、これからマイナーとかアーバンスポーツというのをやはり企業から支えていただいたりしながら普及していって、やがて指導者になったときも、二足の草鞋を履きながら、企業にもちゃんと支えていただくというのが、先ほどの部活動の地域移行にも関連すると思うのです。今、渡邊委員のところで調査していくと、やはり部活動の種目、競技よりも明らかにアーバンスポーツとかマイナースポーツをやりたいという子どもたちが多くなっているので、やはりそういう子どもたちに対しても指導者として支えてもらうということもこの枠組ですごくうまく整理できると思うので、そういったところの観点はすごく大事だと思います。ありがとうございました。

ほかにいかがでしょうか、皆さん。プロスポーツの立場から。

（栗原委員）

おまとめいただきましてありがとうございます。

今、本間委員からお話をいただいたようなこと、私も大変強く感じる部分で、施策の柱Ⅱ1「② 優秀指導者の確保」というところ、大変大事な部分かと思っております。やはり我々プロスポーツの指導者は非常に大事で、監督だけではだめですし、コーチングスタッフ、分析のスタッフ、いろいろなスタッフがいてこそ、やはりトップのパフォーマンスを発揮できるというところはあるのかなと考えております。

また、同時に、確保だけではなくて、その指導者の方が常に新しいトップレベルの指導のメソッドというかエッセンスみたいなものを常に享受できるような環境をスポーツとして作るということも、これもまた非常に大事なのではないかと思っております。指導者の方、さまざまな方がいらっしゃいますので、ご自分の理論であったり考え方のところにこだわりがあるということで、大変大事なことだと思うのですけれど、常に新しいものを取り入れながらスポーツをお子さんたちとか選手たちに提供することができればよりよいスポーツになるのではないかと思いますし、そこは指導者任せにしないというようなことがとても大事なのではないかと思っております。これは、競技団体もそうですし、もし可能なのであれば、県内のスポーツが横連携の中でそういうコミュニケーションが取れるようなものができれば、大変いいのではないかと思っています。

実際、医療のほうでは大森委員がそのような体制を整えていただいているかと思うのですけれども、指導の部分においては、そういうことがもしできるようであれば、我々もやはり、陸上（競技）であったり、どういうふうな体の動き、足の動きで、よりハイスピードなパフォーマンスが出せるのかということを選手たちも日々勉強しておりますので、そういったところがあればいいのかなと考えております。

あとは、「Ⅳ スポーツを資源とした地域活性化・交流拡大」のところでございますけれども、スポーツツーリズムなどの取組やまちづくりの取組という部分は、先ほどお話もいただいたところでございますけれども、やはりスポーツをフックにしたスポーツツーリズムというのは、我々も取り組みたいというところで、新潟県さんのご協力をいただきながら取り組んでいるところではございますけれども、やはりスポーツ団体だけではなかなか難しいというのが正直な実感でございます。ですから、広域の連携というところもありましたし、より地域のどなた、誰かというところをしっかりと浮き立たせた状態でコミュニケーションが取れると、非常に我々としてもやりやすいし、いろいろな提案を出しやすいと考えたところでございました。

（西原会長）

ありがとうございました。特に指導者は、今、日本スポーツ協会などもそうですが、種目・競技団体を超えたところで、共通のメソッドみたいなところをきちんと確立していこうとや

っていますけれども、そういったことを検討してみることもいいかと思います。

平野委員、アーバンスポーツとか、特に、いわゆるツーリズムのお話をいただきましたが、いかがですか。

（平野委員）

骨子でまとめていただきまして、すごく整理されているなという印象を受けました。

その他、先ほど小野塚さんが言っていたような形で、横ぐしを指すようなことがもう少しイメージできればということは、これからなのだろうなと思っています。

スポーツは、もともと、身体の健康であったり、心の健康のための１つのツールと思っていますので、やはりこれからだんだん細かくなっていく中で、そういうものとつながっているということが今後とても大事なのかなと思っています。「（Ｉ３③ アーバンスポーツ等の新たなスポーツの）体験機会」となっていますが、アーバンスポーツというのは国スポ種目でもないわけですので、なかなか組織的にいろいろなところがあります。その中で、教えて終わりというような形ではなく、先につながる、または健康的に広まっていくということが必要だと思っていますので、例えばアーバンスポーツを体験することで、バランス感覚は頭の海馬がこういうふうに変化するなどを示すことができれば誰もがわかりやすいと思います。新しいスポーツは、環境であったり、観光だとかいろいろな形で、皆さんに求められて初めて健康的なものになっていくと思いますので、体験会をするということが大事というよりも、指導者がそういうような目標であったり内容を説いて、健康的に人に伝えられるような内容こそが大事であり、最初が肝心なので、その辺をもう少し、分科会みたいな会を作りながら、目標であったり、方針を決めていただければなと思いました。

スケートボード競技は、パリオリンピックで若手の活躍がありましたが、昨日の夜も、金メダルを取ったのは 14 歳の選手でした。すごく若年層の選手であるということが、これから新しいスポーツ、またはこれから（オリンピックに）ノミネートされているような競技の傾向になっていることを見ますと、これからもスポーツの低年齢化は続いていくのかなと思っています。なおのこと、競技力を上げるためには人間力の向上がなくてはならないので、それをアスリートに分かりやすいように提案するというと逆の形になることもあるのですけれども、私はＮＦ（競技団体）のほうで指導している立場でもありますので、パフォーマンスとかそういうことではなくて、環境であったり自然であったりというところを活かしながらアスリートの身につけていくということを大事に教えていきたいと思っています。ＪＯＣ（日本オリンピック委員会）も「人間力向上なくして競技力向上なし」ということをうたっていますので、健康的なスポーツという観点は重要視していきたいと改めて思いました。

（西原会長）

ありがとうございました。皆さんからもしご意見等がありましたらお願いしたいと思います。

（福崎委員）

ありがとうございます。まず、おまとめいただきまして大変ありがとうございました。非常にバランスが取れているなというところが第一印象、また、相当頑張ったんだなというところを感じました。それが感想であります。

過去ご報告いただいた指標の中で、スポーツが嫌いと答えている子どもたちがたくさんいる。これをどうやって好きにしようかとか、あるいは、子どもたちに体を動かす楽しさを、親子がうまく活動しながらしっかりと植えつけていくなどがありましたが、そういったことを取り組むというのは分かるのですが、どうしてもスポーツのイメージが、いわゆる富国強兵の時代の体育というところがまだまだ刷り込まれているのではないかというところをすごく感じるのです。スポーツという言葉が出た瞬間に身を引いてしまうということで、何とか、「スポーツとはこんなことだよ」というようなものをどこかにあらわせると、あるいは県民の皆さんにお知らせできると、もっとハードルが低くなるのかなという気がしました。そうしますと、この計画自体がよりハードルの低いものになってくるかなというようなところを感じました。

先ほど栗原委員から、スポーツツーリズムのお話がございましたけれども、私もそちらの関係を進めております。その件でお話を申し上げたいと思いますが、まさに、自分たちだけではできない、広域でやらないとできない、特に、人口が、いわゆるキャパがどんどん小さくなっている地域において、ツーリズムをやろうと思っても、自分たちの資産を活かせないのです。やはり広域的な取組、あるいはいろいろな団体を巻き込んでいく活動をしていくことがスポーツツーリズムを生んでいく一番のポイントになるかなという気がしております。これは自分が取り組む中で、今、一番困っているところでお話をしましたが、もし広域での連携といったところを盛り込めるのであればいいかなという気がいたしました。

（西原会長）

ありがとうございました。先ほど、部活動の地域移行で広域という話もありましたが、ツーリズムも広域でとらえていかないとなかなか難しいのかなという気がしました。

ほかにいかがでしょうか。

（嶋田委員）

素案の作成、ありがとうございます。１つ１つがまとまっていて、すごく分かりやすくて、皆さんに伝わっていくものがたくさんあるのではないかと思いました。

障害者スポーツに関して、私が言いたいのは２つあります。

１つ目は、パラ選手がパラ選手の中だけで強くなっているわけではないので、強化指定を受けている選手は、一般のクラブチームや高校、（障害のあるなしに関わらず、）自分たちで活動場所を探して練習をされています。このような一緒にスポーツをとおして行う活動も障害の理解につながっていっているのではないかと思っているので、障害を理解するという形を作るために､いろいろなところで活動ができる雰囲気を作っていただけたらなと思います。

２つ目ですが、体験会を行う意味についてです。パラスポーツ体験会というような形でイベントをしても、そこで終わってしまうので、そこからつなげていけるような流れを何か作っていけたらいいなと思います。そこで終わるのではもったいないので、せっかく体験会で「こういう障害のある方のスポーツがある」ということを知ってもらい、次につながるような何かがあるものにしていく必要があると思っております。

（西原会長）

ありがとうございました。体験会から、日常的に活動できることを伝えていくというところ、そういうところもきちんと、手厚くやっていくと非常にいいかと思います。

（星委員）

皆さんから広域という言葉が出ていて、今、私、バスケットボール協会としてこの席にいるのですけれども、バスケットボールは、子どもたちが体験する機会というのは、新潟ではたくさんあると思うのですけれども、なかなか新潟で普及していない競技、実際にやりたいけれども、例えば上越の方が新潟に来てもらうというときに、送迎をどうするのかという問題があって、そういったところを連携でうまくできれば、どこでも体験ができるような仕組みができるといいのかなと。実際に競技団体の方でそういうことを悩まれている方が多いなということを実感しているところではありますので、そういったところをうまく、何かできればなと思っております。

（西原会長）

ありがとうございました。広域の連携ということでしょうかね。

（青野委員）

骨子案、ありがとうございます。私、専門は子ども幼児期ですので、「Ⅰ　こどものスポーツへの意欲向上や習慣化等に取り組みます」というところですが、1「① 幼児・児童の遊びやレクリエーション」で止まっているのですけれども、それをどうするのかということ、②とかには「提供」とかいろいろ言葉がさらにありますが、ここは言葉足らずかなということで、先ほども福崎委員からもお話ありましたように、運動嫌いの子どもが多く増えている。これをどうするのかというところは、やはりここの幼児・児童の遊びやレクリエーション、幼少年期の運動体験ということが特に重要で、やはり運動好きな子どもを育てる、それはど

こがやるか、それは幼稚園、保育園、こども園の保育者の先生たちということになるわけですけれども、１「① 幼児・児童の遊びやレクリエーション」の何を、これは具体的な今後のことになるのかと思いますが、少し言葉があったほうがよろしいかと思いました。

新しいところで、メディアが今子どもたちの生活を大きく覆っている、やはり運動から離れてしまう一番の原因になっているかと思いますので、親御さんとのスキンシップも含めた体験、その提供、それを、各園でもやりますでしょうけれども、県として例えば何かイベントとかを作り上げていただけるのかとか、その辺を期待したいと思います。

新しい「③ 多様なスポーツ体験の提供」というところで、前回もお話させていただいたのですけれども、子どものスポーツ体験格差、運動体験の格差の子どもたちをどうするのかというところで､その辺の内容がどこに入ってくるのかなというところも少し記述があったら、難しいところですけれども、大切な部分かなと。今、夏休みで、子どもたち、ご家庭に入っていて、こども食堂などもすごく賑やかで、３食をしっかり食べられないご家庭もあるということもいろいろなコマーシャルで聞いております。スポーツ体験格差のある子どもへの機会の提供というところが、貧困対策にも関係するかと思いますが、そこも大切な部分かなと思います。

④も新しい内容で、「④ 学校の体育・保健体育授業の充実」とありますけれども、学校というと、これだけ見ると、普通、一般の方は、小中高の保健体育という形で捉えられるかと思いますが、やはり、先ほども申し上げましたように、スポーツが好きになるか嫌いになるかの分かれ道というのは、幼児期の指針が出された経緯もありますけれども、幼少年期、年中、年長、小学校１年生、低学年の体験ということが将来を決定づけると言われておりますので、そこの記述が、学校だけでは少し物足りないような気がいたしますので、「幼児体育」という言葉もありますので、その辺を少し充実していただけるといいかなと思いました。

私は高齢者のほうにも関係しておりますので、Ⅰ５「③ 高齢者のスポーツ・運動機会の提供と世代間交流の機会提供」というところがそこに掲げられておりますが、今後の具体策、どこが担当してどんなイベントをなされるのか、そのためには予算も必要であるかと思いますが、そこを期待したいと思いました。

最後のところ、ウィンタースポーツのところで、Ⅳ２「② スポーツを資源とした交流拡大の取組（スキー、サイクル等)」とありますけれども、ここもやはり、新潟ならではのウィンタースポーツの充実という意味で、いろいろなイベントに期待したいと思っております。

（西原会長）

ありがとうございました。課長、特に今の骨子Ⅰの１のところ、例えば「④ 学校の体育～」のところに「幼児体育」を入れるとか、文言の修正は可能ですか。

（事務局）

①のところは「幼児、児童の遊びやレクリエーション」で止まっていますので、現行のプランでは「幼児・児童が遊びやレクリエーションを通じて、スポーツ・運動の楽しさや喜びを実感できる環境をつくります」となっており、そういった文言が適切かなと思っています。あと、幼児体育については、今いただいたご意見を踏まえて、検討していきたいと思います。

（西原会長）

分かりました。ありがとうございます。ではよろしいでしょうか。

ご意見をいただきましたが、まだどうして言い足りないことがあれば。よろしいですか。

では、この骨子に基づいて、今ご意見いただいたことを反映しながらこれから進めていただくということで、第３回のときには素案を作っていただくということになると思います。

今日、概ね皆さんから共通しているのは、それぞれの項目がすごく関連しているので、そこはやはり、評価指標などでやっていくと、これとこれの項目がここで評価できますということになると思うので、そういった形で捉えればいいのかなと思っています。

あとは広域という話がいろいろと出てきましたので、そういうものも意識しながら、さらに具体的なところを進めていただければと思います。

では、以上で議事は終了したいと思いますが、事務局から何かありましたらお願いします。

（事務局）

皆さん、貴重なご意見をありがとうございました。次回はいただいたご意見を踏まえまして骨子案を確定して、素案のベースとなるものをご提示したいと思いますので、引き続き、皆さんのお力添えをよろしくお願いします。

ありがとうございました。

（西原会長）

ありがとうございました。それでは、議事終了になります。事務局にお返しします。